越谷市文化連盟
平成１７年度

『こしがや文化芸術祭』
平成１８年２月２６日（日）　11:00~17:00

ＮＰＯ法人・越谷市郷土研究会
展示部門出品紹介

於　越谷コミュニティセンター　ポルティコホール

『元荒川の桜の変遷』	高崎　力
『西新井・西組の観音堂』	斉木　一征
『桃が咲き乱れた往時の越谷』	原田　民自

1．元荒川の桜の変遷

高崎　力

現在、「越谷の桜」といえば誰しも「北越谷の桜」と返答してくる。しかし、越谷の桜土手には百年の歴史がある。

《日露戦争勝利の桜》

今から約百年前、明治三十七・八年（一九〇四～五）の日露戦争で辛勝した日本国内では、戦捷記念になるものが種々作られた。当時の越ケ谷町では、かつて瓦曽根溜井の広い水辺は、昔より「越ケ谷八景」といわれる程の景勝の地であったので、ここに水辺を主とする公園構想が町長始め、町有志の間で話題となっていた。そこへ日露戦争勝利の記念事業ということで、川辺に国の華といわれた桜を植えることになり、瓦曽根と越ケ谷の境あたりから寺橋（今の宮前橋）付近までの土手道（現在の中央市民会館、市役所、埼玉県越谷合同庁舎、柳町は元荒川の河原であった）の田圃側に植樹した。広い溜井に映える桜は見事であった。この桜は昭和三十年頃には枝折れや株枯れなど哀れな姿となりつつも咲き続けていたが、瓦曽根溜井が埋め立てられ、国・県の出先機関、そして越谷市関係庁舎などに伴う道路の拡幅、舗装などで姿を消した。

《紀元二千六百年の桜》

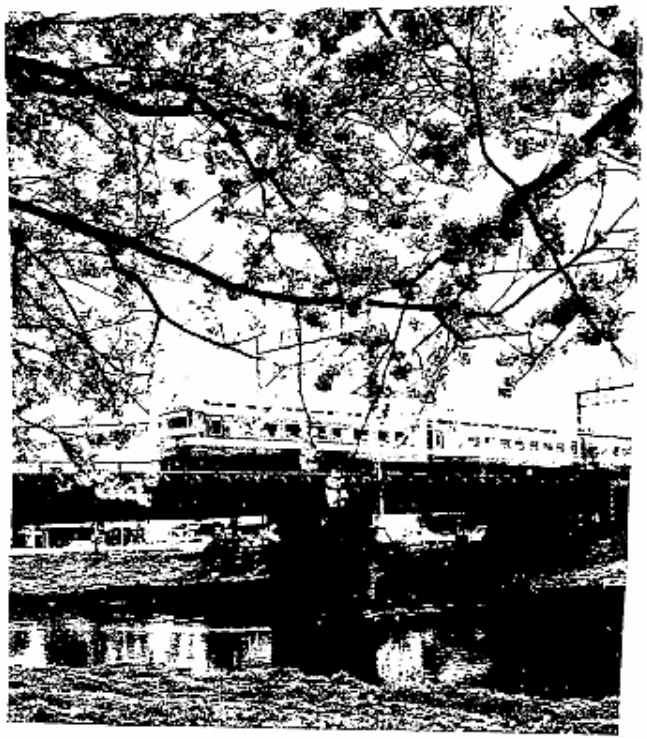
次の桜の植樹は、昭和十五年（一九四〇）の紀元二六〇〇年記念の時である。当時、中国との間に戦争が勃発していて、国は戦意高揚奨励の施策を進めていた時期であったので、越ケ谷町青年団では、明治の桜に続いて、隣の寺橋そばの御殿町から東武鉄道橋あたりまでの土手道に桜を植樹した。これを「興亜の桜」と呼んだ。翌十六年には、開花の写真を戦地にいる郷土出身の兵士に慰問袋の中に入れて送付した。この桜は、その後、人為的に伐採されたようで、今では元荒川橋の南詰め東側の土手に、その桜の名残がわずかに残るだけで、元荒川橋の南詰め西側の土手に記念碑のみが寂しく建っている。

《戦後の桜》

次が北越谷の桜である。前の二回の元荒川の桜は戦争とか国家意識の高揚とかに利用されているのに対して、北越谷の桜は、平和の象徴のようである。昭和三十一年（一九五六）北越谷地区の対岸の宮本町の大野寛人氏らが中川多四郎氏、松村武平治氏らと相計り、桜の苗木一、二〇〇本を北越谷を取り巻く元荒川の両岸に植樹した。後に、宮本町・神明町側の土手道の桜は、交通の妨げとなるとの理由で伐採されたので寂しい。しかし、残された一方の北越谷側の桜は、地元民の努力で見事な並木に成長し、今や東武沿線の桜の名所にまでなった。

北越谷の桜にあやかってか、せんげん台の新方川（二十間堀）土手の桜もようやく見られる程までに成長した。

大正期の瓦曽根溜井堤の桜（越ケ谷側）



北越谷の桜から東武鉄道及び対岸の越ケ谷を見る

御殿町あたりの桜（対岸）

2・西新井・西組の観音堂

斉木一征

《西新井村の歴史》

西新井村は、江戸時代以前から、岩槻城主・太田十郎氏房の家臣である斎藤若狭守光郷（西新井村の斎藤家初代）が治めていた地域であったのであろう。天正十八年に岩槻城が豊臣勢によって落ち、この時に斎藤若狭守も討ち死にしている。その跡を受け継いだのが、太田下野守（岩槻城主太田氏房をさすとされる）の妻の子で、幼名が「岩月丸」と呼ばれた人物である。後に斎藤若狭守光郷の末娘を妻とし、斎藤加左衛門尉氏貞を名乗り、斎藤家二代目となる。その後も斎藤家代々が西新井村の名主として治めていったのであろう。

江戸時代に幕府の手によって書かれた「新編武蔵風土記稿」によると、徳川家康が天正十八年八月一日に関東に入国すると、この地は幕府の御料所（直轄地、天領）となった。寛文二年（一六六二）になると土屋相模守の領地となる。元禄十一年（一六九八）には、代わって小笠原佐渡守の領地となる。宝暦六年（一七五六）には、西新井村は、幕府の御料所と大岡出雲守の領地とに分かれて支配される。その後も、幕府の御料所と大岡主膳正の領地となる。また江戸時代から、西新井村の小字として西前、立野、堀之内などがあったことがわかる。

西新井村の戸数は、この風土記稿が作成された文政年間（一八一八から一八二九）では七十四戸であるが、明治九年（一八七六）になると八十七戸と増え、人口は四六九人（男二三一人、女二四八人）となる。

《西組の観音堂の誕生》

西組の観音堂は、江戸時代は「正覚庵」と呼ばれていた寺院である。御本尊は、観音様（観世音菩薩）である。現在は無住であるが、当時は住職が住んでいた。

観音堂（通称「観音様」）では、戦前は毎月のお念仏講や境内にある庚申塔の祭りが盛んに行われていた。また、十二年ごとの午年に行われる観音様のお開帳（厨子と呼ばれるお箱の扉を開けて、そこに安置されている秘仏の御本尊を拝むこと）が平成十四年（二〇〇二）に実施された。

村の人々は戦前戦後の物の乏しい、辛い、そして苦しいとき、観音様に集まり、若干の米、野菜などの煮炊きものをお供えし、お念仏を捧げて仏の加護を願い、合わせて村人同士の意志の疎通と協力を図ってきた。

観音堂の墓地で現存する一番古いものと思われるのは、吉田広太郎氏の明暦年間（一六五五から五七）の墓石である。この正覚庵を配下に置く西教院の創立年代は、法誉上人が開山し、七年間の在住の後、元亀三年に没しているので、永禄年間（一五五八から六九）といえる。また、正覚庵七代目住職と西教院十二代目住職（鏡誉上人）が延享元年（一七四四）に正覚庵境内の南東に祀る六地蔵の法要を行っている。以上からすると、正覚庵の誕生は、西教院の誕生の七十年後の寛永年間から正保年間（一六二四から一六四七）にかけて、つまり、三代将軍家光（在職は一六二三から一六五一）の頃と推定できる。

昌取後に

屋敷内に祀られていても野原や畑の隅に祀られていても、その地域で共同してお稲荷様の初午まつりが行われている。また観音堂では、お念仏講、観音様の午年のお開帳が行われ、村の鎮守様である石神井神社の祭りでは、獅子舞や天狗の出現なども見られる。古くから伝わるこれらの伝統文化を今一度見直し、守り育てることも大切なことと思う。

※故人となられた西組の田村精之氏の原稿（平成十四年三月）をもとに作成しました。

念仏鉦用品（百萬遍）
田村精之

庚申

西新井村講中
岡本清左門
同　弥兵衛
大久保跟右門
同　安兵衛
高橋弥右門
田村佐左門
菅　甚左門
同　藤左門
吉田吉三郎
三木宗吉
大久保八左門
田村弥右門
同　伊右門

聖観音像
田村精之

3．桃が咲き乱れた往時の越谷

原田民自

越谷の桃林が華やかだったのは昭和三十年代までで、宅地開発により今ではすっかりその面影もなくなった。大房・大林・袋山・大沢などの地域の桃林の素晴らしさ、豪華さを残す記録の一つとして、当時の新聞記事を中心に取り上げた。

江戸時代の越谷は文化年間に書かれた「看花三記」（成島司直著）によると、杉田（現、横浜市）の梅、小金井（現、小金井市）の桜とともに、近郊花見の一つとして紹介され、「（大房や大林の桃の花が）岡も野も紅の雲の中を往来する如し」と表現している。江戸からたくさんの花見客が訪れていたことは言うまでもない。

浮世絵界における風景画家として名をなした歌川広重が、富士山をバックに「富士三十六景　武蔵越かや在」として描いている。［展示№．1］

また、新編武蔵風土記稿の挿絵に、筑波山を背景に、古利根川に沿って越谷の大吉の対岸の松伏側の桃林が乱立する景観が描かれている。向かって左上に筑波山がある。［展示№．2］

明治・大正・昭和を通じても越谷の桃林は名高く、新聞にも何回となく取り上げられた。明治九年（一八七六）四月の新聞記事は「大沢の桃を見に行った人が、袋山という小高いところから桃林を見ると、一目で千本、空まで赤く見えるほどに咲き乱れていた」とある。［展示№．3］

明治四十年（一九〇七）四月の新聞記事は、「都では桜が散り始めているが、田舎は桃の盛りで……、両国より汽車を一時間乗り、越ケ谷に入ると、沿道は桃色の村、天も大地も匂わんばかり」として、田舎である越谷の桃林が、いかに素晴らしいかを紹介している。［展示№．4］

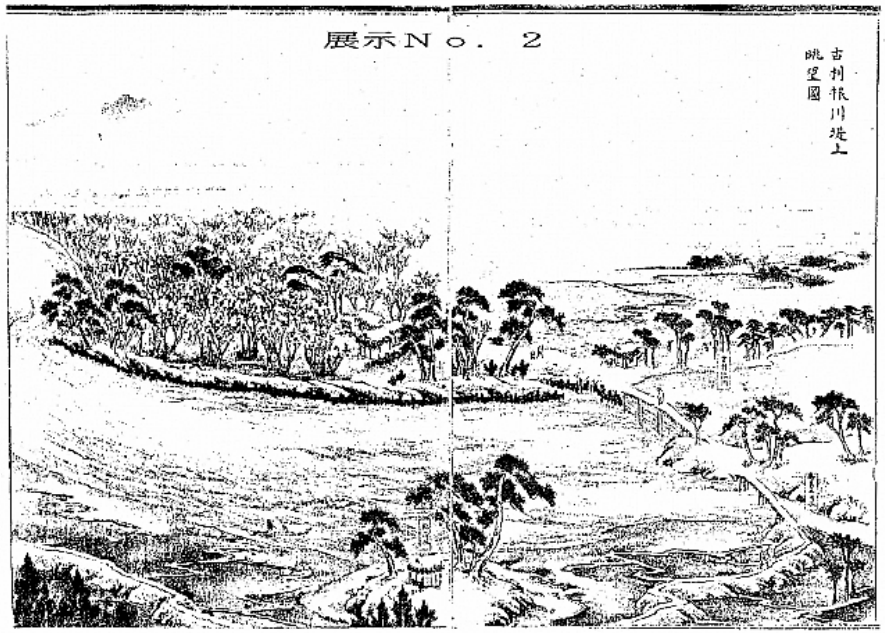
越谷の桃の素晴らしさは、宮内庁鴨場の入口のそばにある宇田川商店（現、北越谷五－四－四五の宇田川商店）発行の「越ケ谷桃林絵はがき」によってもわかる。（高崎力氏所蔵）

これらの新聞により、かつて越谷の桃林がいかに素晴らしいものだったかがしのばれる。

なお、明治三十五年三月に、大房の浄光寺を中心とした地域に「越ケ谷古梅園」が開園されると、越谷は梅林としても有名になっていく。

※「広報こしがや」に載った市史編さんだより二五三号『越谷の桃林と藤』（本間清利氏著）と一五五号『越ケ谷古梅園』（高崎力氏著）を参照しました。

展示Ｎｏ．２



展示Ｎｏ．３

明治9年(1876)4月5日 読売新聞

○武州大澤の桃と見に行く人が一昨日歸ッての話に昨今ぐ眞盛りで秩田屋といふ料理屋の左りの裏山といふ小高い所から見ると一目千本といふやうで空まで赤く見えるほどにて二七の日には越谷宿の市で雛と賣店と張子の達磨と賣る者が多いも名近所の茶見世で賣ると此在方では雛檀へは必ず達摩を飾るのだといひましたと

○一昨日は在見連の男が女のかつらで笠ッて向じまで遊査につかまるも有り又大きな聲で唄どうたッてつかまるも有りましたが秩風景は御免と蒙りたいものだ

明治11年(1878)11月23日 埼玉新報

○管内菓物の最も珍品と云ふのは埼玉郡大房大林增林等の數村より生ずる桃子と增林村の放牛舍にて西洋の法に據り糖製となし醫學長坪井爲春氏の檢閲されし甘露桃なり味ひ清涼にして甘美に其功用は腸胃と調へ通利を善くし膽汁の過泄と停め又中暑の症に宜しく船中の時量に妙なり當節價格も一層低下にし大鏡十八錢別號大鏡十七錢五厘小鐵十五錢なりと云

明治18年(1885)4月22日 読売新聞

○大澤の桃　杉田の梅小金井の櫻と並名と謂ふ越ケ谷在大澤の桃い此頃眞盛にて其内盡もよきい大澤より一里ほど南ある松伏村にて同村の石川島助と云る畜家の近傍い一面に桃林にて實に目覺しきもの〻由ある夕同所までい東京日本橋より七里につき車に乘れば其日の内に往て還るに充分ありと云ふ

明治40年(1907)4月10日 読売新聞

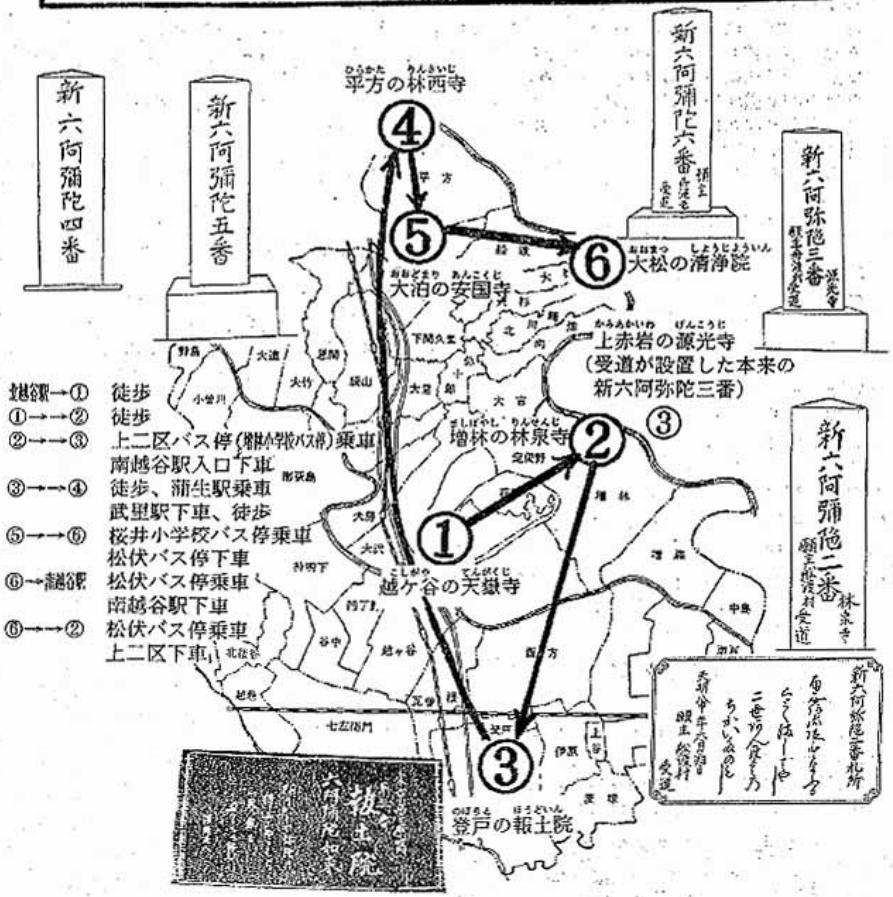
展示Ｎｏ．４

○越ケ谷櫻壁の桃　郡は櫻の名うくに綻びんとすれど、田舍は桃の盛りにして、東郊の春色今見ごろなり、兩國より一時間、滊車越ケ谷に入れば、沿道なべて桃色の村、天も大地も勿はんばかり、事窓に吹き入るゝ春の風の、尚ほ色に染むかと疑はる、武里櫓壁に至るも盡ず、古利根の流れ緩やかに、舟浮び鳥鳴き、樂しや樹の歌所へて、菜種の畑麥の畑、青黄相連つて映ずるところ、白もゝ緋もゝ今を盛りに咲き薬ゆる、此のわたり人家少く路うねれり、行く手に遙ふ部人もあらば、彼の機織る音の方へ行けよ、老いたる翁の椁を取つて、されば流れを逆上る、白い手拭姐さん被り、赤い襷の色の花、右と左と上と下ごこう水を緣さつて彩霞たなびく、文字さながらに桃源の里、今何の世なるかを問ふに遑なからんかし。（一記者）

大正13年(1924)7月28日 読売新聞

越ケ谷の桃林

越ケ谷驛で汽車を降り行くこと七丁餘で通する十數町歩の自然林である、桃花咲き揃ふ春の越ケ谷を知るものは多いが實夏の桃園の緑蔭を逍遥の風味を味ふするものは少い、既に管弦な掛茶屋などが桃園の合間に點在して數百れぬ程の人の中を清い小川が流れて一段の清味をそゝり自然の儘した一大公園野趣の持つ滋味余く最後に來るものは——枝坊から區役へ——もあるを痛切に感じた。

越谷の『六阿弥陀めぐり』をご存じですか？

・江戸時代の越谷地域では、春と秋のお彼岸のころに一日かけて
「六阿弥陀めぐり」が盛んに行われていました。
・現代人の皆様、正月の「七福神めぐり」もよいですが、
「六阿弥陀めぐり」をやってみませんか。
そして、「越谷の六阿弥陀」を郷土の誇りにし、多くの人に知ってもらいましょう。
・昔ながらの徒歩では一日かかります（朝から夕方まで）。
現代人の便利な乗り物、自転車ですと、朝出て昼、
又は、昼出て夕で充分に済みます。
順路を４→５→６→２→１→３、或いはその逆ですと短い距離で済みます。